

保育者と父母を結ぶ雑誌

特集
子どもたちが
光り輝く街に

ちいさい なかま

昭和47年2月10日第3種郵便物認可
1987年3月1日発行（毎月1回1日発行）
昭和59年8月21日国税京都特別税承認雑誌
第7731号

NO. 200—1987

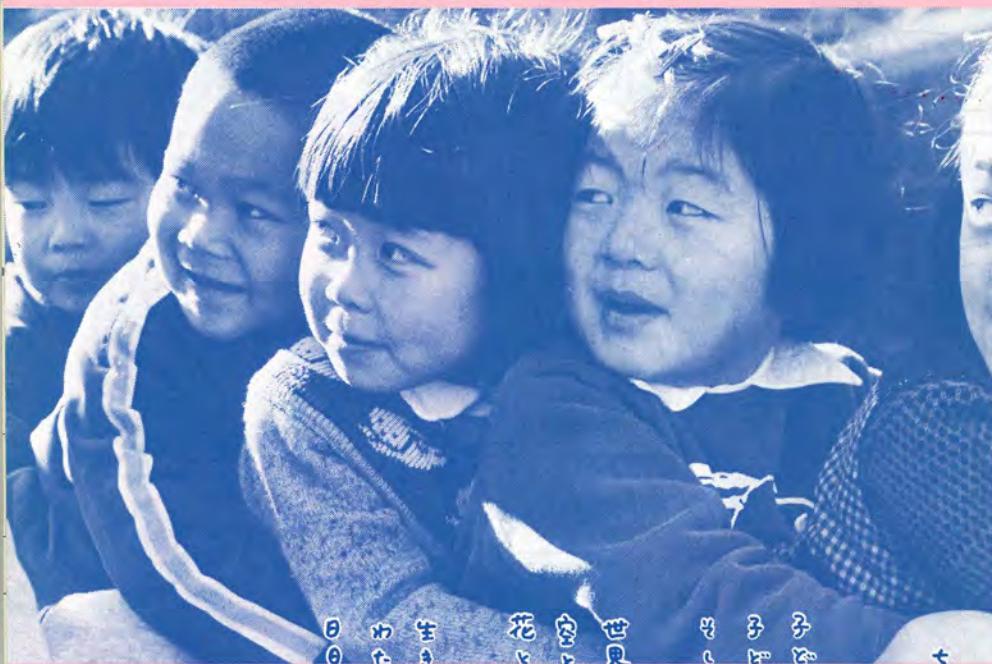
創刊200号記念

3月号



ちいさいなかま 創刊200号

どの子もいきいきすこやかに!!
はばたけ ちいさいなかまたち



世界中の子どもたちよ
空と海と大地の温もりにつつまれて
花になれ 歌となれ 未来になれ

生きる力 言ふ喜びをたしかめあつて
わなしたちのりちりさいなかまゝよ
日々新たな夢と勇気と通常に輝やけ

ちいさいなかまに

峯
陽

星野富弘の本

花の
詩画集

鈴の鳴る道

野や 山の——花々にたくす心の風景!

花にたくす心の風景“花の詩画展”
で全国の人々を感動させた星野富
弘の最近数年の詩画51点と隨筆11
編を収録した待望の詩画集。手足
のマヒを乗りこえ、口に筆をくわえ
て描き続ける絵と詩のハーモニー。

定価1,400円

96年8月発行
A5判 上製本



新刊発売

かぎりなく やさしい花々

好評発売中

器械体操のすきなスポーツ
マンが、中学の先生になつ
てまもなく事故で手足の自
由を失い、やがてわずかに
動く口に筆をくわえて詩や
絵をかきはじめた。……
感動深い手記。

定価880円

A5判
上製本

偕成社

子育ていきいき ネットワーク

明日をひらく子どもたち——力を合わせて育てたい!!

保育所や幼稚園、学校、学童保育や児童館など、どこの街にも子どものための施設があります。それらの施設が、それぞれの特性を生かし、地域に施設を開放し、子育てのネットワークがつくれたら……。
子どもたちの笑い声が街中にひびき、だれもがいきいきと豊かに育ち、暮らせる街になるように……。

保母さん、保健婦さん、お医者さん、幼稚園や学校の先生、学童保育、児童館の指導員など、どの街にも子どものために仕事をしている人がたくさんいます。その人たちが街中の子どもたちのために知恵と力を出し合えたら……。
ひとりぼっちの子どもや、ひとりぼっちのお母さんが、一人もいなくなるようにならう。

イラスト・片桐りえ

子どもたちの明日のために
今こそおとなたちが
手をつなぐとき…



1000万人共同署名は、
日本全国に広がり、各
地で創意・工夫あふれ
た楽しいとりくみがす
すめられています。



社会問題としての
保育費問題

秋の大運動推進ニュース
12/15 中央決起集会



売上税の網
徹底追及 第一弾
防衛費、実質止める外す

減税 増税 差し引き
賃金: 月額 7万5,000円
内々 7万7,000円
マスコミ報酬 7万2,100円

老後、子ども、いのち直撃

政府 組合

士官候補へ大増税、暮ら

を決定 公益 底本

結局は大増税じゃないか

ア、
は大
ア、

中曾根内閣は、三〇五議席をたてて六二年度予算
で、軍事費 GNP -1% のワクをついに突破！そのつ
けを国民に、と売上税（大型間接税）の導入、マル優
廃止をたくさんでいます。

さらに、保育所、老人ホーム、障害者施設など福
祉施設にはお金がかかりすぎる、という理由をつけ
て、国の予算を大幅に削り、『福祉産業』のもうけの
道具にしようとしているのです。



日本一小さい村 愛知県・富山村
村長に要請行動。役場前で村長
とニッコリの愛知のキャラバン隊。

どんな小さな町や村にも、保育園
はあります。

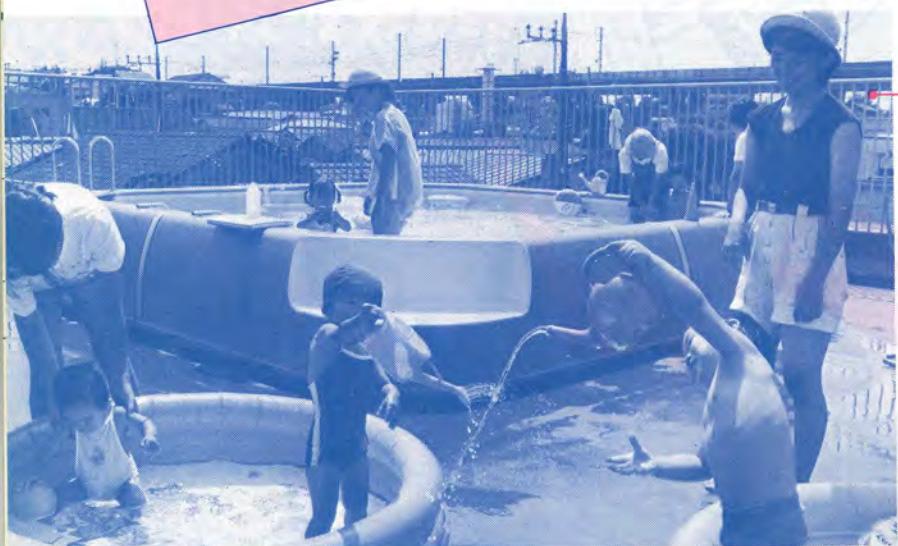
保育園が地域の子育てセ
ンターにと、日本全
国でさまざまな
とりくみが
されています。



京都 のくりくま保育園では、園文庫
を地域の子どもたちに
開放しています。



はびきの赤ちゃん会
羽曳野市立はびきの保育園では
午睡時に保健所の保健婦さんの
協力をえて、育児相談検診を行
い、地域の赤ちゃん、お母さん
によろこばれています。



品川区の公立保育園では、午睡のときを
利用して、家庭にいる子どもたちにプー
ルを開放しています。

「またきてね」「ハーハー」
片井 令子

こぐま保育園で行つてい
る「保育園であそぼう！」
に先生からのおさそいで出
かけてみました。二歳八カ
月の男の子ですが、友だち
と仲よくあそべるか心配で
した。そして運動場にはい
ると「ぱく、はずかしい」と
いつもの元気はどこへやら
……すると友だちが「いつ
しょにあそぼう」といって
さそつてくれたのです。
運動場では、派手な泥ん
こあそびに、大満足のよう
でした。なんといつても、
先生のニコニコしたお顔と
やさしい声かけ、友だちの
「あそぼう」のさそいが、と
てもうれしくはげました。そして
「よしはるくんまたきてね」
のおさそいに「はーい」と
元気よく返事。

(静岡 母親)



鳩ヶ谷「あそぼう会」は、保母や園児とあそ
んだり、園庭の小動物の世話をしたり、給
食をたべたり、たのしい半日をすごします



秋田・こばと保育園では、町中にくりだして
ばんでんまつり。地域の子どもたちのたの
みのひとつです。

山梨つくし保育園
では、青空新聞を
月一回地域に配布
しています。
月一回園を解放し
て青空広場をやつ
ています。



浅川永子

四歳から私の保母生活も二〇〇号と共にひとくぎり定年退職となります。

職場のなかま、地域のかま、『ちいさいなかま』を通して北は北海道、南は沖縄までのなまたちの声に励まされての年月でした。

子どもも大人も幸せな社会を作るために結集し、ますます発展する『ちいさいなかま』二〇一号と共に私の人生の第一歩を踏みだしたいと願っています。あとに続く若い方々、「苦しい時こそ手つなぎを／＼を永遠の合言葉として身近かな疑問・矛盾を大きな運動に広げ、公的保育の場を守りぬいてください。

(東京・保母)

堀内智子

望んで望んでやつと生れた長女。たちまち保育所探しに追われ、やつと産休明けから入れる保育所を見つけた時は、産休が終わる数日前でした。いざ仕事が始まってみると、今度は忙しく忙しく、ただ日常に埋没する日々。そんな時、初めての父母会で出会ったのが『ちいさいなかま』でした。「（忙しさ）をなまにして（84年12月号）」をみんなで読み合わせました。それから毎月、『ちいさいなかま』は、社会の中での子育て、政治とのかかわりあいに、気づかせてくれます。

(静岡・母親)



高橋登美子

春が過ぎ、保育園生活に慣れた頃、隣近所とのおつかいが親子共々うすくなっているのに気がつきました。

「いつもいっしょにあそべる子ども集団があつたらいいな」「親も気軽に話せる場があつたらいいな」と思っていました。

そんな時、保育園の夏まつりの作業をお母さんたち

とする中で、「ちいさいなかま」を読んでいるなら読者会でもやろうか」と話がまとまりました。子どもや保育園の事、自分の身のまわりの事など話は尽きました。

(高知県保育運動連絡会機関紙『風の子』より・母親)

西 良倫

妻が、時々食卓の上になにげなく置いている『ちいさいなかま』

私は特集に目をやり、『わが幼き日』に目を通し、必ず『各地のたより』にも目を通している。

わが娘の保育園や、妻の職場の京都の私立保育園に重ねあわせて、子育てにかかる情報や意見や考え方などを知りたいからなのだろう。

昨年度、保育園保護者会の本部役員をただ一度だけ経験したからだろうか、わが娘や妻のことがチョット泣きになるからだろうか、今も、妻の帰りを待ちながら、読んでいたところです。

(京都・父親)

山地八重子

長男が私のお腹に生命をやどして三ヵ月目。共同保育所の保母になったとき、創刊二号を紹介してもらつたのがはじめての出会いでした。

大保連の専従者になったとき、『ちいさいなかま』の担当者になりました。

『ちいさいなかま』を一千部にして保育連に専従者をノの願いが実現して、九月から堺の半専従者になりました。



田中久子

四歳と一歳の女の子の母親ですが、毎月楽しく読ませてもらっています。四月から長女が幼稚園へ行きました。私たち父母と幼稚園側とのよい関係づくりのためにも、これからもずっと読んでいきたいと思います。

情報がはん乱する中で、迷つてばかりで、ノイローゼぎみになつた経験のある私にとっては、確かな教えを得ることのできる雑誌は手ばなせないものとなっています。しつかり悩んで、私の出した答えは、ポイントは守つてあとは私流で子育てしようということでした。ポイントと極端にならない私流も学んでいけると確信しています。

(三重・母親)

宮本ひとみ

私が共同保育所の保母になろうと思ったのも、保育資格がとれたのも、『ちいさいなかま』が一つの要因だったと思います。そして今は、保育運動に役立て、門真の働くお母ちゃん、お父ちゃんに「よんで」とすめています。

(大阪・保母)

(『大阪の保育運動』より)

やさしさにいろいろとられた 人間のきずなを もつと太くたくもしく

『ちいさいなかま』編集長 深谷編作
『ちいさいなかま』編集部一同

こんな子どもの詩を読んだことがあります。

おとうとがあまりうますようにたべるので

わたしのぶんをわけてやつた

おとうとといっしょにたべると

おかしのぶんりょうはへつても

なんとなくたのしい

たしかに家族がテーブルを囲んで食事をすることは、心をなごませます。というより実際は、なごんだ心がテーブルを囲ませ、今の時代を生きぬく戦友として、家族

のきずなをいつそう強くする、というべきでしょう。

しかし、忙しい毎日、慌しい生活が、年ごとにひろがっています。「忙」という漢字は心が亡びる、「慌」は

心が荒む、を意味するといいます。今、働く者の家庭では、父親は、毎日残業で、子どもの寝顔しかみられません。家族そろって食卓を囲むのが、週二回あればいい方です。たまにいつしょになった食卓も、疲れぎみの父親は無口だたり、グチ話で暗くなりがちです。

おとうさんのかえりがおそかったので

おかあさんはおこつて

いえじゅうのかぎを

ぜんぶしめてしまいました。

おとうさんはねていました

(鹿島和夫『一年一組せんせいあのね』理論社)

思わずわらいこけ、なぜか、なみだもにじんできます。みんな人間なのです。どのお母さんだつて、夫の健康を心配しています。子どもと接する夫の時間のないことに、心を痛めています。食卓が、二度手間になるのを腹立たしく思っています。それが妻であり、お母さんといふものです。

ところが、その妻にして、最近では、男なみに非人間的な労働条件を、押しつけられるようになつて、子どもの寝顔しかみられないお母さんもめずらしくあります。

そういうなかで、このころ保母さんから、「親自身が育てるというより、保育園にまかせ、たよりつきになつて」いる「高学歴の親に子どもとの接し方を知らない人が多い」「子どもに意欲がない。すぐ疲れたという」などといったクチを聞かされることが、多くなりました。けれども、その背後にある、親の生活と労働の異常な変化に、目が届いていないように思われるのです。そして保育園の側に、保育者に、本当のやさしさが求められるように思われてなりません。

それで想いおこすのは、「子どもの二十四時間の生活を知るなかで、朝夕の保育は、豊かな海と陸の波うちぎわ」という清水住子（大阪・いづみ保育園長）さんの文章なのです。（『ちいさいなかま』82年11月号）

やさしい保育でありたい——と清水さんはいう、そのやさしさとは、親に対しては、働くながまとしてのやさしさであり、子どもに対しては、専門家としてのやさしさなのですが、それは決して、抽象論ではありませんでした。たとえば、「朝の保育」について、清水さんは、「朝の保育は、個々の生活から集団生活へのウォーミングアップの時間なのです。親たちにとつても、気持ちよく安心して、職場へむかえるかどうかに関わる重要な意

味を持ちます。子どもにしても親にしても、たとえ、家庭でつまらないトラブルがあつたとしても、朝の保育のなかで、その気分を整理し、活動へのスタートをきることができます。保育者にとつては、登園と同時に、視診でその子の気分や状態を読みとり、親を明るく送り出し、つまずきを持つていてる子には、とくに声をかけたり、だっこをしたりして集団のなかへとけこむように、橋わたしをしてやらなくてはなりません。いくつもの質の違つた対処を同時にこなさなくてはならない大変な時間です。こんな時こそ、真の保育力が必要なのでしょう。」と書いておられました。

いってみれば、そのようなやさしさにいろいろとられた、保育者と父母、そして子どもたちの人間のくさりが、日本のある街にもこの村にも、つくれられてきました。今もつくれられています。それがもつとたくさん、もつと太くたくましくなつて日本列島に光り輝くようにしたい、「ちいさいなかま」がそのお役に立つようにしたいという思いや切です。

二〇〇号を記念するにあたり、あらためて保育者と、父母を結ぶ雑誌としての願い、その一端を示しました。みなさんの一層のご協力を願いいたします。